津田昇平教話　別冊

令和二年　越年祭教話

令和二年十二月三一日

金光教尼崎教会

稽古とは一より習い十を知り十よりかえるも

とのその一

令和二年、越年祭を共々にお仕えさせて頂くことができました。

大晦日(おおみそか)を無事にお迎えすることができまして、一年を振り返って、ここまでのことをお礼申し上げる。また、この一年間を振り返って、自分自身を省(かえり)みて、ご無礼、お粗末、不行き届き、気付いてるところもあれば気付いていないところが大半だとは思うんですけれども、そういったご無礼、お粗末、不行き届きにも思いを馳(は)せて、改めてお詫(わ)びを申し上げる。お礼を申し上げて、お詫びを申し上げて、それがまたここからのお願いになる。

まあ越年祭ですから一年を、やっぱり意識しますね。今年一年のことをお礼申し上げる。お詫び申し上げる。じゃあ、お願いはというと、やは

りまた次の一年を、ということにやっぱりなりますんで。今日の残りの時間はもちろんのことなんですけれども、明日からの令和三年、後もう数時間後ですけれども。その一年を、ありがたい一年にして頂けるような、そういうおかげを蒙(こうむ)らしてもらえるような。ま、そのためにこの大晦日をお迎えして信心する私(わたくし)たちは、どういう心持ちにならせてもらったらいいのか。ま、そのことを思いながら、お祭りをお仕えすることができました。

お礼申し上げて、お詫びを申し上げて、お願い申し上げる。それぞれにあると思うんですよね。ま、私(わたくし)で考えましても、尼崎教会のことを思って、今年はコロナのことがありましたしね。それがまず大きな社会

の、また尼崎教会の御用(ごよう)のあり方、お祭りのあり方、或(ある)いは信心のあり方をそれぞれ見つめさしてもらったり、変えていかなければならないことが、たくさんあったと思います。

ま、そのことと、御神前(ごしんぜん)を新しく整えさせて頂くことができました。御扉(おとびら)を付けさして頂くことができた。二十年以上願ってきて、ようやくおかげを蒙らして頂いた、そういう御扉ですんで。それを、今年におかげを蒙らせて頂きました。

他にも色々あるんですけれども、まあ特に大きなこととして、このコロナのことやら、御扉のことやら、そういったことをやはり思うに至(いた)りますね。そう思うと、まあようここまでそれぞれに命を頂いて、お守り

を頂いて、おかげを蒙らして頂いてきたなぁ。で、コロナで世界中でたくさんの方が亡くなっておられますけれども、尼崎教会にご縁を頂いて、ご信心さして頂いてる方に限りましたら、皆命(みな)をお守りを頂いて、日々の健康のおかげを頂いて、職場、学校、家庭それぞれ生活する上で、まあ難しいことはあったとは思うんですけれども、でも命もお守り頂いて、ここまで一年間をね、無事に過ごすことができたということは、やっぱり、神様のお守りを頂いて、おかげを頂いてきた一年やなということを思うんですね。

まあそういったことを、私自身のこととは別に、お参りをされる皆さんのことをお礼を申し上げて、そして、まあお礼を申し上げることはで

きるんですけれども、もう一つ、やっぱりね。先生という立場になりますんで、できてありがたいところ、ここはもう少しおかげを頂いていかんといかんなあというところとが、もちろんお互いにあるわけです。私（わたし）を含めてね。

まあそういったところを、足りなかったところをお断り申し上げながら、ここからのお育て、まあ改まりというのはお育てのことですから、人間として、天地の間に生きる人間として、正しく生きることが出来るように成長さしてもらう。育っていく。そういうおかげを、やはり頂きたいですね。そのことをやはりお願いをさしてもらうことになります。

今年の元日に年頭のみ教えをね、それぞれ頂いたと思うんです。頂いたみ教えを、心に掛(か)けながら一年間過ごすことができたら、それだけお稽古(けいこ)になったと思います。それでおかげを頂いたということも、たくさんあるでしょうし、でもまだまだ足りんかったなあ、行き届かなかったなあというのが、必ずありますから、そこをまた、ここから、来年に向かって、おかげを頂いていく為の、お稽古を続けていってもらいたいなあと思うんです。

今、御神前(ごしんぜん)の八足(はっそく)の下にも、明日の元日祭が終わってからですね。お祭りが終わってから、み教えをお下げさしてもらって、お参りをされた方が今年一年間、どういうみ教えを、大事にして過ごせば、神様のおかげ

を頂けますかってという、その問いかけに対する神様からの、お下げ下さるご理解、み教えですね。四百四十四あるんですけれども。

どれも二つとして同じものはありません。だから、それぞれに神様にお願いして、「どうか私に相応(ふさわ)しい、今年一年相応しいみ教え、このみ教えを大事にしたら今年一年おかげを頂けるということを、指し示(しめ)していただけるようなご理解をお授け下さい」と、よくお願いしてですね。おみくじではありませんのんで、心してお願いして、そして頂いてもらえたらなと思います。

頂いたみ教えをしっかりと、一年間、三六五日、心にかけて、意識して、大事にしていかれたら、やっぱりそれだけお稽古になりますんでね

え。お稽古したらした分だけ、教えというのは身に付いていきます。

できなかった自分が、できるようになっていく。少しできてたことが、よりできるようになっていく。信心が進んでいく。つまり、神様のおかげが頂けるような、そういう人間に自分が、成長するということにもなります。

ま、それを神様願って下さってますから、おかげを授けたくて仕方がないという、そういう神様ですから。そのために、神様だけでもおかげは授けることはできないし。教えて頂いたご理解、み教えを、このみ教えを大事にして、このみ教えを手本にして、ようようわが身わが一家を練習帳にしてお稽古してごらんと、言って頂いているわけですから、そ

れを、み教えを意識しながら、み教えと自分の心とを照らし合わせて、できるだけ教えに沿うようなお稽古をさしてもらう。

それができた分だけ、神様のおかげをキャッチすることができますから。それを神様、願って下さってますんで、その年頭のみ教えを大事に大事にして、一年間、三六五日を過ごして頂きたいなあと思います。

前にもお話したことがあるんですけどね、よく越年祭で、年頭のみ教えの話を、一年間振り返ってどうでしたかっていう話から、来年のことかて話ししますね。そん時によく思い出すのが、千利休（せんのりきゅう）の残した歌があるんですよね。時々、お取次（とりつぎ）の中でも引用するんですけど、

稽古とは一より習い十を知り十よりかえるもとのその一

【千利休】

『稽古とは、一より習い十を知り、十よりかえる、もとのその一』ま、千利休ですからお茶ですよねえ。でもまあここではお茶の、ということを言ってるわけでもないですよねえ。それだけじゃないんです。信心のお稽古でも何でもそうですね。

教祖様は信心のことを、手習いと一緒と仰いましたけど、何でも一緒

です。ピアノだろうが、野球だろうが、バレエだろうが、学業だろうが、何でも一緒ですけれども、まあ学ぶということ。で、稽古するということ、練習するということですね。

信心の稽古もおんなじなんですけれども、その稽古というのは、ほんとにこう一番最初、一から習うわけですね。最初はほんとにお参りをされて、柏手（かしわで）の打ち方、分からないとこから、神様のお名前から、お取次（とりつぎ）を頂くということやら、そういったこと。ご祈念の作法、そんなことも含めてですよね。家で神様をお祭りするということやら、御神米様の頂き方。衣食住ありとあらゆるものを神様のお恵みとして、感謝して生活していく。

嬉(うれ)しい時、悲しい時、腹が立つ時、楽しい時、まあ喜怒哀楽どんな時も神様と一緒に。神様に、嬉しい心があったらお礼申し上げて聞いて頂き、悲しいことがあったらまた聞いて頂き、お礼申したり、お願いしたり、そして、いつでもどこでも何をしてても、神様と一緒に生きるということ。それを色々教えて頂くわけですよね。

自分の身の上に起こってきた事柄(ことがら)を通じて、自分自身であったり、家族であったり、会社のこと、学校のこと、まあ色々あると思うんですけれど。要するに、自分の身の上の事柄を通じて、信心の実践(じっせん)に励(はげ)んでいくんです。お参りして、お取次(とりつぎ)を頂いて、教えて頂いたこと、それを糧(かて)にして、学びにして。で、一年、三年、五年、十年と信心がね、続いていけ

ば、一通り、こうして信心したらいいんやなということは、およそのことは分かるんで。そんな難しいことじゃありませんのんでねえ。

難しいというのんは、まあ信心の稽古をさしてもらうのが難しいとこなんかもしれん。けれどまあ、言って頂いてることは、そんなに難しいことじゃないんですよ。

だから教えて頂いてきたことを実践していく。参拝さしてもらう。ご祈念さして頂く。お取次を頂く。自分を見つめる。ご祈念しながら話をする。ご祈念しながら聞かして頂く。車を運転するときもご祈念する。着いたらお礼申し上げる。お手洗い行く時、お風呂入る時、買い物しながら、料理しながら、お布団に入ってから、何かしながらでも神様にお

礼申したり、お願いしたり、仕事の始まり、仕事の終わり。授業の始まり、授業の終わり。そうやって神様と一緒に生きる。そういう人間として本当の生き方、本来の生き方。「人間は人間らしくすればよい」っていう教えですけど、神様と共に生きるというのが、人間ですから。その生き方を教えてもらって、お稽古していく。パッと教えてもらって、まあ全部教えるっていうわけじゃなくって、その時、その人にあったご理解を教えて頂く。それをお稽古さして、だんだん身に付いていったら、また次の課題、次の課題と教えて頂くんでしょうね。

で、お稽古というのは、『一より習い十を知り、習って十を知る』知るとは言っても、できるとは言ってませんもんね。まず習って、十までま

ず理解して知ると。じゃあどうするかと言ったら、十一じゃなく、また今度、『十よりかえる、もとのその一』一に戻る。一から十までできるっていうことを言っているんじゃなくて、一から習ってまず十までを知る。知ったらまたもとの一にかえる。で、また繰り返しお稽古をする。

それを何度も何度も繰り返すんですよね。教えて頂いたみ教え一つとっても、それを繰り返すし。で、み教えも、だんだん、だんだん一年目、二年目、三年目によっても、信心が違うでしょうね。

まあスイミングでもバレエでも何でもそうですけど、一年経っても、三年経っても、五年経ってもやること一緒やったら、そりゃあ成長してないっていうのと一緒ですから。だから教えて頂いたことをお稽古さし

てもらい、だんだん、だんだんと、一段一段、階段を登るように成長していくんです。

今年一年のみ教えとってもそうですよね。まあ明日、年頭のみ教えを頂く。じゃあそれを意識して、お稽古（けいこ）する。三六五日お稽古する。ま、教え自体はいっぺん読んだら理解はできると思います。まあ何回か読んでいたら、ああ、こういうみ教えなんやなぁということは分かりますよね。で、それを意識して、生活の中で実践（じっせん）していく。

でもそれで、パッとできるっていうわけじゃありませんから、それを何度も何度も繰り返しお稽古していくんですよね。この繰り返していく

お稽古っていう中で、できなかった自分ができるような自分に生まれ変わっていく。

四代様のご理解で、

くりかえす　稽古（けいこ）のなかに　おのづから　生まれ来る
なり　新しきもの

【四代金光様】

というご理解がありますね。『くりかえす稽古（けいこ）のなかにおのづから生まれ来るなり新しきもの』してるお稽古はおんなじなんですけれども、そ

こから新しいものが生まれてくる。つまり、新しい自分が生まれてくると言っても過言じゃないと思うんですよね。同じことやと思います。

そやってこう信心というのは、やっぱりお稽古が大事なんです。ただ参って、手を合わして、ていうだけじゃなくって、教えて頂いたことを、どれだけ稽古してるんか、そこが大事になってきますよね。まあそら学校やら塾やら、通わないよりは通った方が、何かと学ぶ機会が多いですから。でも塾に行ってもあんまり聞いてなかったら、行くばっかりで全然成長はしないでしょうね。

ピアノを習うんでも、習字習うんでも、まあ行くのは行くけれども、言って頂いたことをあんまりお稽古せんかったら、意識して真剣にお稽

古せんかったら、年数ばっかり経って、あんまり変わらんでしょうね。「字があんまりきれいにならへんわ」とか、「あんまり泳げないわ」とかあると思います。もちろんその人なりの成長でいいっちゃあそうなんですけれども、自分なりに精一杯のお稽古をさしてもらっていく中で、神様がおかげ下さいますんで、そうすると成長のおかげを頂けるはずなんですよね。

無理なことは神様おっしゃいませんから、今の自分にとってふさわしいみ教えをご理解を下さいますから、そのみ教えを意識しながら、心に掛(か)けてお稽古をさしてもらう。

まあそう思うと、年頭のみ教えというのんは、「一年間このみ教えを大

事にしてごらん。そしたらおかげを授けてあげられるよ。この一年間、大きいおかげを頂けるよ」と、神様が約束して下さってるんですよね。それを大事にしないのは、もったいないなぁとは思います。で、最初の一か月ぐらいはよく覚えているんです。二、三か月ぐらい経ってくると、だんだん何となくね、抜けてったり、忘れてしまったり、いうこともよくあるなあと思います。

ま、だからまた忘れんように、もう一度立ち返る。最初は意識して、お稽古してやってたら、「あ、そやった、そやった、ほんまやなあ」と思うてたんが、ひと月、ふた月、三月ぐらい経ってきたら、何となく抜けるような感じになってくる。知ってはいるけれども、なんか自分の中であん

まりこう普段意識して、引っかかって生活することが出来なくなってたり。まあそうこうしてる間に、また転んだり、痛い目あったりして、そしてまた、「あ、そやった」って言うて、み教えに立ち返るっていうこともよくありますけど。

一通りお稽古して、じゃあまた立ち返って、初心に立ち返って、み教えを初めて、まっさらに聞かして頂いたような、心持ちを意識して、そしてお稽古していく。結局それしかないんでしょうね。

いつもみ教えを新鮮にっていうのはね、ほんと難しいもんでね。大事にすればするほど、だんだん、だんだんそれが当たり前になってきてしまって、自分の中で引っ掛かりがなくなってしまうんですよね。ま、そ

こまでは普通そうだと思うんですけれども、そこでまたもう一度、自分の中に入れ直していく。でもそれは、すごく意識しないと上手くいかないなあと思います。ま、私の経験ではありますけれど。

だから、『一より習い十を知り、十よりかえるもとのその一』これ十一があったらねえ、なんかハッと、「ああそうなんや、今度これしたらいいんや」と、はハッとするんですよ。で、ハッとしたほうが、そん時だけはねえ、なんか学んでる気になれるんですけどねえ。これまた一に戻りって言われたらねえ。これ一に戻るって、なかなか反復練習で難しいんですよね。

でも信心もやっぱり基礎（きそ）が大事で、応用というよりも、まあほんとに、

参拝、御祈念（ごきねん）、御取次（おんとりつぎ）。教えて頂いたみ教えを、ほんとにこう今の日々の暮らしの中で実践（じっせん）していく。お稽古していく。結局それに尽きると思うんですよね。

新しいみ教えっていうよりは、まあほんとに十年くらい信心さしてもらったら、後は状況は、少しずつ変わってくる。で、その状況の中で、これまで教えて頂いてきたことを実践できるか。で、実践できるようになったとしたら、またちょっと違う状況が現れてくる。で、その状況の中で、このみ教え、お稽古してきたことを実践できますか。で、できるようになってきた。じゃまた、これはできますか。ってまあほんとにねえ、信心のドリルを与えてもらっているようなもんですけど。

できるようになったら少し応用。でも、やってることはと言ったら基本と一緒なんですよねえ。この状況の中で、神様に心を向けて、信心させてもらうことができますか。お礼を申せますか。お詫び申し上げますか。お願いできますか。謙虚(けんきょ)でいられますか。ありがたいと思いますか。不遜(ふそん)でないかどうか。至らん自分であるということを忘れずにできますか……っていうこれまで通らしてもらってきて、自分が気付かしてもらったはずのところを、何度もやっぱりこう立ち返らんといかんのんですよねえ。で、立ち返って欲しいんですよ、神様はね。で、そこを繰り返し繰り返ししていくということが、信心の深みなんですよね。

成長するっていうとこ、高くなっていくっていうイメージもあるんで

す。まあそれ間違いじゃないんですけれど。でも、信心が成長するっていうことは、高くなるというよりは、深くなるということのが、実際だろうと思うんですよね。

お取次を頂いて、色んなことを自分の実践の中で教えて頂いたら、後はそれを繰り返して繰り返して、深めていく。まあ深まっていくということが、成長っていうことです。まあ、成長っていったらこうねえ、上にあがっていくというイメージですけれど。でも信心の中で、成長していくっていうことは、どんどん、どんどん深くなっていく。低くなっていく。潜(もぐ)っていく。まあそういうことやろうと思うんですよね。

で、教祖様は神様とね、非常に深く繋(つな)がって、「天地のしんと同根なり。

天地の神と同根なり」というふうにして、神様から言って頂いたこと。天地のしんと同根なり。「同根」って同じ根っこっていうこと。根っこですもんね。

上の方で、こう葉っぱで、同じようになるというんじゃなくて、同じ根っこって、こう信心して深まれば深まるほど、その根っこのところが神様と一緒やなってなってくる。これ潜っとるんですよね。土の中にね。

ま、そう思うと、信心っていうのはこう上に上がっていく、まあ上がっていくそのイメージが悪い。間違っているとかいうんじゃないんですけど。でも成長とか、お育て頂くっていうと、まあ子供がおっきくなっ

たりとかですよ。いうこと考えても、上達していく、上達っていうのは上って書きますしね。上の方に向かっていく。でもまあそうなんですけれども、信心の中での上達、信心の中での成長っていうことは、それは深まっていくっていうことなんですよね。深くなっていくということ。

新しいことが身に付くというよりも、『繰り返していく』一通り教えてもらったら、それを繰り返し繰り返し、『一より習い十を知り、十よりかえる、もとのその一』ほんとそしてまた一よりまあ習うと。

でまた十を知り、『十よりかえるもとのその一』じゃあその一からまた『一より習い』、元の一に戻って、「あ、これ知ってる知ってる」っていうんじゃなくて、『一』よりまた習うっていうんですもんねえ。

習うんです。「あっ、知ってるわ」じゃないんですよ。習う。一から習う。で十を知る。で、『十から帰る元のその一』元の一に戻ったら、『一』よりまた習うんです。もう繰り返し繰り返しなんでしょうね。でもそうやっていく中で、本当に身に付いてくる。深まってくる。ありがたいと思ってたことが、もっとありがたくなってきたり、至らんかったというふうして思っていたものが、「自分があん時思っていたよりも、もっと自分は行き届かんなあ、至らんなあ、ご無礼やなあ」ということが、深く分かってきたり。

お礼を申し上げるにしても、お詫(わ)びを申し上げるにしても、まただからこそお願いに繋(つな)がるわけですけれど、その一つ一つの思いやら、祈り

やらが、こうまあ感じ方、喜びであったりとかね。悲しみ、まあ全部ひっくるめてこう深くなる。重くなる。と、いうのんが、信心の成長になるんだろうなと思うんです。

三代金光様はね、

日日（にちにち）がさら

【三代金光様】

と仰いまして、毎日毎日がまっさらって、これまた難しいんですよねえ。ほんとに難しいですよ。でもまあそういう心を、できないとか、無理

とか思わずに、それを心に掛(か)けてご信心をなさったんでしょうね、三代金光様は。だから、日日がさらでございます。まっさらっていう意味合いで。

で、私も考えたら、よくお結界(けっかい)で言うんですよ。今日という一日を、神様から白い紙を、キャンバスを頂いているから、その日その日、どういう風な一日を描いていくのんか。嬉(うれ)しいことがあったらカラフルになるし、暗い気持ちになったら真っ黒になるかもしれんけれども、でも、できるだけ苦しいこと、悲しいことがあっても、真っ暗になるような中にでも、そんな中にでも、頂いているおかげ、ありがたいところを、やっぱりこう描いていくことができるのか。そらぁねえ、お天道様がお照らし

下さって、緑豊かで、ほんとに美しい景色で、「うわあ、きれいやなぁ」って、カラフルでねえ、「ええなぁ」っていうのもまあ、それも美しいで、ありがたいんですけど。

でももう真っ暗闇(くらやみ)で、漆黒(しっこく)になってねえ、もうそんな中にでも、暗闇の中にでも、美しい星空が点々とあるだけでも、「ああ、美しいなぁ」ってなるんですよ。でも星空っていうのんでも、「ああ、きれいな星空やなぁ」って思ったとしても、ほんとはずーっと輝いているんでしょうね。でも日が昇ったら、全部それがかき消されちゃうんですよ。で、それでまあ、また他のものが見えて美しいなあと思ったらいいんですけどね。

夜になったから、星が輝いているんじゃなくって、ほんとは昼でも夜

でも変わらず輝いているんでしょ。でも暗ーくなって、もう絶望的になった時ほど、ほんとに輝いているのがよく見えるっていうこともあるでしょうね。それが星であれ、月であれ。

まあそれぞれ生きてて、今どんな時間をそれぞれ過ごしてんのか、ありがたいなあいうのんか、なかなかしんどいなあいう時なんか。ま、それぞれ人生の天気がありますから、一本調子でいい調子ばかりっていうことは無いと思うんですよね。まあ穏(おだ)やかに過ごせてる時もあれば、非常にもう荒波ん時もあるでしょう。心配、不安に押しつぶされる時もあるだろうし。

でもまあ、どんな人にも神様は一日を、まっさらな一日を下さいますから、そのまっさらな一日を終わる時に振り返って、どんなふうにして描いてきたのか。信心頂いているもんとしてね。で、教えて頂いたことを、心に掛けてお稽古（けいこ）して、でまあ、寝るときに神様に提出するわけですよ。あるいは、次の日持って来て、お結界で提出（ていしゅつ）することもあるかもしれませんけど。

ほんとにただ真っ暗闇になるんか、真っ暗闇の中にでも、星空が見えるような散りばめられているような感じなのか。まあきれいな星空いうても、全部真っ暗にして、点々描くだけっちゃそうなんですけど。でもやっぱりそれが、きれいだなぁと思ったりするわけですもんね。

普段なかなか感じることが出来ない、ありがたいということに気付けないものが、ほんとにどん底に行ったからこそ見えてくる、感じ取れるもんだってやっぱりあるわけで。で、そういうふうして、信心が深まるっていうことは、これまで見えなかったものが、よく見えるようになってくる。

ほんとはあるんですけどね。でも、あって当たり前になるんじゃなくて、それがありがたいことなんだっていうことが分かってくる。一年前より、二年前より、五年前より十年前より、よりこう分かってくる。自分の中でこう強く、深く、刻み込まれてくる。まあそういったことが、信心の成長になってくるんでしょうね。それが分かった分だけ、自ずから、

人間としての正しい生き方。人として、神様とともに生きるということ。天地の道理に沿って生きるということ。天地のリズムに合わせて、和音になって、ハーモニーになって、生きるということ。まあそれが段々と、少しずつ少しずつ、一年前の自分よりも、二年前の自分よりも、段々と上達していく。

まあそのために日々のお稽古、繰り返すお稽古、が大事になってくるんですけどね。ま、それを毎日毎日お稽古さしてもらいましょうと。今月今日(こんげつこんにち)で。お稽古していきましょうと、教えて頂いてるわけですね。ま、それをこうしてご神縁(しんえん)を頂いたお互いは、意識して、信心の、稽古に、わが身わが一家を練習帳にして、励むことができる。で、ま、うまく

できないときにでも、お参りして、お取次(とりつぎ)を頂いて、教えて頂いて、お稽古さしてもらうことができる。

まあ何でもかんでも、尋(たず)ねて教えてもらうという、まあ最初は教えてもらいますけど、何でもかんでも教えるっていうのも、それも違いますよね。

うちの子でも、「お父さん、これ勉強ちょっと教えて」言われてもねえ。「これ答え何？」って言われたら、答え何っていってもねえ。答えてしまってええんかどうかって考えますでしょう。そらぁ算数とっても、足し算でも引き算でも、そら答えることは出来ても、答えてあんまり意味なかったらねえ。「あ、答え、これは5やで」って言うて、「あ、そうなん

や」って、「5」書いて、じゃあ次の問題は、「これ3やで」、じゃあ「3」書いて。これあんまり意味ないですもんね。

じゃあやっぱりそこでヒント。指を使って、「5引く2は?」とか、五本指を出して、「じゃあ、2引いたらなんぼ残ってるか?」とかね。ま、ヒントくらいはできるでしょうね。

まあお取次頂くというても、最初はこう教えてもらって、後は立ち止まって考えたり、考える時間を神様が与えて下さる。それを一緒に待たせてもらったりとか、いうこともあります。だから何でもかんでも全部教えてもらうっていうわけじゃあないですし、それがいいとも思わない。

でも、こういう時にはこういうふうな心持ちで信心したら、おかげに

なるんだなっていうことを、段々とこう、優しい問題から、身に付いていく、教えて頂いていく。いやそれはすごく大事なことですよねえ。もうどうしようどうしようって、バタバタするんじゃなくて、「あっ、こういう時には神様ってお願いしよう」って。子供が体調が悪い。じゃあ「どうしようどうしよう」って、「うわぁ」ってなるんじゃなくて、「あっ、神様にお願いさしてもらおう」とか。「かわいそうやけど、ちょっと置いてでも、ゆっくりご祈念さしてもらおう」とか、「お参り行ってくるね」とか。これ、おかげの頂き方でしょう。

おかげの頂き方を、それぞれ自分の身の上のことを通じて、きっと教えて頂いてきているはずですから、だから教えてきて頂いたものを、忘

れないように。もうそれは、前教えてもらったんやから、もう今必要ないっていうんじゃなくって、立ち返っていく。何度もね。『一より習い、十を知り、十よりかえる、もとのその一』

そしてまた、わが身わが一家を練習帳にして、それが自分の体であったり、家族であったりね。車を運転している時であったり、ま、色んなこと。生きてる限りは、生きてるんですからね。なんでもこう、難儀(なんぎ)であったり、困ったことっていうのは、そこら中にあると思いますよ。

擦(す)りむいた一つとってもそうですよ。忘れ物したとか、財布落としたとか。そんな時でも、「どうやったらおかげ頂けるんやろか」とかね。「わあ、どうしようどうしよう」っていうんじゃなくって、そこで「神様にお

願いさしてもらうんやなぁ」とか、「お参りさしてもらって、お届けして、お願いしよう」とか。で、「おかげを頂いた。見つかった。よかったよかった」で、お礼参りも何にもせずに、お礼のご祈念もせずにって、それでいいんやろうか。で、そういうことでは本当のおかげが頂けない。次のおかげも頂けなくなる。やっぱりお礼を忘れんように、お参りをさしてもらう。お礼申し上げる。ご祈念さしてもらう。お財布使う時でも、お金使う時でも、神様にお礼申し上げて使わしてもらう。そういう一つ一つ、いつでもどこでも何をしてても神様を意識して、神様と一緒に、暮らしていく。神様のおられる暮らしというのを、意識していく。

で、それがまあ、人間が人間らしく生きるということであって、それ

を忘れないように。神様の御恩（ごおん）の中で、大恩（たいおん）の中って言いますけどね、大きな恩の中で、生かされて生きてるお互いですから、それを忘れないようにしながら暮らしていく。

ま、それを信心頂いたその日から、ここまで、それぞれにね。ご神縁頂いて何年になるんか、めいめいでしょうけども、それを意識して、生活してるはずなんです。で、来年もまたおんなじなんです。その一年を繰り返す。

年頭のみ教えを新しくいただいて、それはそれで結構なんですけどね。でも、これまで教えて頂いた、自分自身の身の上で教えて頂いてきたことを、やっぱり忘れんようにせんといかんし、今年のみ教えだって、ま

た大事にしてもらいたいし。み教えを五年分、十年分ぜーんぶ覚えて、意識して、まあそれが出来たらそれでいいんですけれども。

私なんて、一年一年しか出来なかった人間ですから。でもこれまで教えて頂いたところが、やっぱり自分の中に残っているし、それをこことい時に思い出して、それを持ち出して、引き出しから出して、今の自分に当てはめて、もう一度お稽古する中で、立ち行かんかったものが立ち行くっていうことが、やっぱり多かったですよね。

そこに気付くまでは、一生懸命（いっしょうけんめい）ではあっても立ち行かんということが多かったような気がしますけど。でもそこでうまくいかんというので立ち止まって、考えてみたら、ああ数年前に教えて頂いた、稽古さしても

らってきたことをもう一度、ここでやっぱりお稽古せんといかんのやな。で、それを意識してお稽古してできるようになってくると、すっと道がついてくると。ま、そんなことの連続やったような気がします。ま、今でもそうやと思いますけどね。

まあそういう意味では、今年のみ教えは今年限りというわけでもなく、ほんとはまあ、死ぬまで自分自身が心に掛(か)けながら、生活していくことができたらいいなあと思います。一年に一つだけっていうても、結構多いですよね。一年一年これ増えてったら。三代様は教祖様のご理解ね、「一つでも結構です」言うて、それほんとに、大事にして貰いて、自分の

身に付けたらもう、それだけで結構ですくらいに仰ってましたけど。

でもそれぐらい、いうたらこう、み教えを頂いて、それを日々の生活の中で、実地のお稽古（けいこ）をさしてもらっていく。

でもまあ筆も要りませんしね、ピアノも要らないですから。信心のお稽古は、いつでもどこでも何をしててもできますよ。まあ、起きてても寝てても、会社でも学校でも、お広前でもどこででもできますから。

だってねえ、「信心とは、しんはわが心、じんは神である。わが心が神に向かうのを信心という」っていうことですもんね。自分の心が神様に向いていくということが、信心の、ほんとにもう、いろはの「い」ですけれど。でもこのいろはの「い」が、なかなかできない。難儀（なんぎ）なことになっ

たら難儀な方に心が奪(うば)われて、難儀の虜(とりこ)になって、神様、神様というよりはね、難儀になって、ああでもないこうでもないって。じゃあ神様と言うてるようでも、心はもうここに在(あ)らずでね、いうことになってはる。でもそこでまた、「しんはわが心、じんは神である」って、ほんとにいろはの「い」。一番最初に初めてお参りした人に、信心てなんですかて、やっぱり教えるけどそうなんですよ。「しんはわが心、じんは神である。自分の心が神様に向かうのを信心て言うんですよ。いつでもどこでも何をしてても神様、神様言うたら、神様、神様言うてたら、それで神様に通じるから」って、お参り初めて来た人に言いますもん、いっつも。

でもこれ、十年信心した人、三十年、五十年信心したのもやっぱりお

んなじなんですよねえ。分かってる分かってるって、分かってるようで、なかなか実践（じっせん）するっていうことが、簡単じゃない。

日日（にちにち）がさら

【三代金光様】

三代様ね。毎日毎日まっさら。その心でやらんと、昨日は出来ても、今日は出来んかったとかあります。二十年前からお稽古（けいこ）してても、じゃあもうずっと出来るんかといったら、そう単純でもない、やっぱり。なんかことがあった時に、「ハッ」としたら、バタバタ、バタバタしてしまっ

て。

信心が落ちるということだってあり得（え）ますんでね。だから、お稽古さしてもらうのは、ほんとに大事やなあと思います。新しいお稽古をするというよりも、これまで教えて頂いたことを、繰り返し繰り返し、深めていくということが、一番大事なんだろうなあと思います。まあそんな中で年頭のみ教えを一つ頂けるということは、また新しいみ教えがねえ、自分の中の人生の中に加わっていきますから、こらぁ、なかなか考えたら重いもんでね。

でもそれを神様に教えて頂いて、教えて頂いたことをまた大事にして、それはそれでせっかく神様が一年間、これ大事にしたらええよ言うて、

課題を教えて下さってるんですから、やっぱり取り組ましてもらいましょうよ。取り組んだ分だけおかげになります。やっぱりね、信心のお稽古は嘘(うそ)つきませんからね。そらぁほんとにそう思うんですよ。一生懸命(いっしょうけんめい)お稽古してはるな、いう人はやっぱりね、おかげ頂きます。やっぱりそれだけ成長もします。成長もそらぁ早い遅いって、それはあるかもしれませんけど。でもやっぱりお稽古したらした分だけね、おかげになりますよね。嘘はつかないですから。と、いうことを思います。

あと、今年もね、あと数時間、もう十何時間かな、あと九時間ぐらいか。九時間ぐらいで今年も終わりますけれども、年頭のみ教えを大事に

しながら、あとの九時間は、お願いはいいんでね、お礼申し上げましょうよ。この一年間お礼申し上げて、で、振り返ってね、お願いは私しときましょう。皆さんのこと、来年のことお願いしましょう。それはお願いします。だから皆さんはお礼申し上げて、振り返って、お詫(わ)び申し上げるところはお詫び申し上げて、まあでもやっぱり、お礼は大事にして欲しいですね。

一月からね、どんなことがあったかな言うて、ちょっと振り返るのもいいもんですよ。こんなことがあった、あんなことがあったいうて。振り返るだけででも、ああようここまでおかげ頂いたなぁってなりますもんね。

はい、まあどうぞ、残りのこの数時間も大事にして、ありがたい一年やったなあと思わしてもらえるように。大変苦労もあっても、でもおかげをたくさんいただいて、ありがたい一年やったなあと、お礼申しあげられるような、そういう信心の締（し）めくくりを、今年をね、締めくくりをしていただきたいなあと思います。

明日は令和三年の元日祭を、午後一時半からお仕えさせて頂くことができる。年頭のみ教えはお祭りが終わってからにいたします。ま、それまではお下げすることはありません。まあ例年であればね、初祭りまで、来年は一月の九日かな、まで年頭のみ教え、置いてるんですけれども。まあコロナのこともありますしね。まあもうしばらくはちょっと置いと

こうかなと思います。お広前(ひろまえ)じゃなく、お結界(けっかい)に置いとく形になるかもしれませんけどね。

ま、どうぞそれぞれに、パッて取るんやなくて、よくご祈念して、頂いてくださいよ。ようご祈念せんと、上手くいかんと思いますよ。

はい、まあどうぞ、こっからもおかげ頂いて下さい。よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話　別冊

令和二年十二月三一日　越年祭教話

令和六年二月七日　初版発行

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五